

あるだろう。

(20) 「心理学・倫理ガイドブック」では、面接は「一種のストレス場面である」ので、以下のような配慮の必要性が挙げられている。つまり、「回答しやすい質問を面接の最初に設定したり、協力者の回答内容に従って質問の順序を変えていくこと、協力者の回答を面接者が理解したところを相手に伝えてみることに、協力者の疲労に気づかう」などの配慮である（古澤ほか二〇〇〇、四七―四八頁）。

(21) 福武直はこのように述べている。「しかし、作業仮説は、調査を嚮導する基礎的な枠組として機能する反面において、これを用いる調査者の科学的態度に欠けるところがあるばあいには、調査研究を誤る危険性をもっている。すなわち、（中略）作業仮説が入念につくられればつくられるほど、研究者はこの仮説にひかれやすい。また、ここで附言すれば、研究者のもつ世界観の立場や個人的偏見も、客観的な調査研究の中に入りこんで、調査をあやまることが少なくないのである」（福武一九八四、四七―四八頁）。

〔文献〕

- 江上涉 一九九八 「社会調査はどのように進めるのか」、森岡清志（編）「ガイドブック社会調査」日本評論社、九九―一二三頁
奥田道大・田嶋淳子（編）一九九五 「新版・池袋のアジア系外国人―回路を閉じた日本型都市でなく」明石書店
小宮敬子 二〇〇〇 「看護婦が病院でフィールドワークすること」と、好井裕明・桜井厚（編）「フィールドワークの経験」せりか書房、二二―二五頁
桜井厚 二〇〇三 「社会調査の困難―問題の所在をめぐって」、『社会学評論』第五三巻四号、四五―四七〇頁
佐藤郁哉 一九八四 「暴走族のエスノグラフィ―モードの叛乱と文化の呪縛」新曜社
佐藤郁哉 二〇〇二 「フィールドワークの技法―問いを育てる、仮説をきたえる」新曜社
佐藤達哉（編）二〇〇四 「現代のエスプリー特集…ボトムアップ人間科学の可能性」四四―一四号、至文堂
谷岡一郎 二〇〇〇 「社会調査」のウソリーリサーチ・リテラシーのすすめ」文春新書
玉野和志 一九九八 「調査の企画を具体化しよう」、森岡清志（編）「ガイドブック社会調査」日本評論社、八五―九八頁
玉野和志 二〇〇三 「サーベイ調査の困難と社会学の課題」、『社会学評論』第五三巻四号、五三七―五五一頁
富田英典・藤本憲一・岡田朋之・松田美佐・高広伯彦 一九九七 「ボケベル・ケータイ主義」ジャストシステム

- 直井道子 一九九八 「調査票はどうつくるのか」、森岡清志(編)『ガイドブック社会調査』日本評論社、一四五―一六六頁
- 中野卓 一九八〇 「戦中・戦後日本社会学史外伝(その二)―アルガ改めアリガ改めアルガの意味」、『書齋の窓』二九三号、六一―六四頁
- 中野卓 二〇〇三 『中野卓著作集第一巻―生活史の研究』東信堂
- 福武直 一九五八 『社会調査』岩波書店
- 福武直(・原純輔) 一九八四 『社会調査 補訂版』岩波書店
- 古澤頼雄・斉藤こずゑ・都筑学(編) 二〇〇〇 『心理学・倫理ガイドブック―リサーチと臨床』有斐閣
- 宮内洋 二〇〇〇 「共同研究の中のへ私」とへあなた」、日本発達心理学会ニューズレター第三二号、五十六頁
- 宮本常一 一九六九 「日本を思う―無性格国家ニッポンの由来」、『月刊ペン』(後に『宮本常一著作集第一五巻』未来社、三四―四九頁に集録)
- 森岡清志 一九九八 「序にかえて」、森岡清志(編)『ガイドブック社会調査』日本評論社、一―四頁
- 安田三郎・原純輔 一九八二 『社会調査ハンドブック 第三版』有斐閣
- 安原茂 二〇〇〇 「上巻解説」、布施鉄治『調査と社会理論―布施鉄治著作集 上巻』北海道大学図書刊行会、五九―一六一―一五頁



「あいつら」から「Y君」へ、
そして……

勤務校（二〇〇四年当時）では学内の全敷地内が禁煙となっていた。そのため、喫煙の習慣がある学生さんたちは休み時間になると、大学の敷地の外に一目散に向かうことになる。次の講義があるので、それほど遠くには行けない。大学周辺には喫茶店が一つあるのみ。そこで、校門の近くで多くの学生さんたちが固まって、煙草を吸うことになってしまう。それは、かなり自立つ光景だ。吸殻のポイ捨ても少なくはなかった。そこで、教員には喫煙指導という職務があった。校門近くで喫煙する学生さんに、路上で座り込まないように、吸い殻等をポイ捨てしないようにと注意を行なうのである。また、学内のトイレの中などで喫煙している学生さんを発見して捕まえることも職務の一環だった。また、大学周辺の路上駐車を取り締まりも行なっていた。私もこのような職務をずっと行ない続けてきた。就職した当初は、まだ教員として認知されていなかったせいか、ポイ捨てを注意した際に、無視されたり、「ばかじゃねえ、こいつ」や「キモッ」などと罵られたこともあった。ポイ捨てされた吸い殻を拾っているすく横で、吸い殻をポイ捨てされると、とてつもなく悲しい気分に陥った。しかし、数年が経つと、私も「大学側の者」として認知されてきたように、

ただ近づいていくだけで、「携帯灰皿を持っていますから」と先回りして答えてくれる学生も増えた。そのような中に、非常に自立つ数人がいた。坊主頭でサングラス姿に、百十口をゆうに超えるような体格だ。そのような風体の男性が数人集まって、煙草を吸いながら話をしていく様子は、恐い。私も正直に告白すると、「あいつら、恐いなあ」と思っていた。学生に対してそのような感情を持つことは教員としてあるまじきことなのかもしれないし、恐らくお叱りを受けることだろう。しかし、言い訳をさせていたくならば、私はこれまで35歳で初めて就職するまでに、数多くの塾、予備校、専門学校、短期大学、大学、大学院と様々な場で教育に携わって、ご飯を食べてきた。これまで教えた生徒さん、学生さんは、のべ2万人は超える。その中で、殴られそうになったり、ナイフを向けられたりしたこともあるなど、ちょっとした恐い目にも会ったことがある。だから、「恐い」という感情をどうしてもなくすことはできない。

さて、先ほど述べた「あいつら」についてである。学科が異なっていたこともあり、「あいつら」を教えることは一度もなかったし、やり取りとしては喫煙に関して注意するくらいであった。その後、めぐり合わせが、私

の所属学部・学科が変わり、「あいっら」の必修科目を突然担当することになった。最初の職務はかなり肩に力が入っていたと思う。そのうち私の中で、「あいっら」から一人ひとりを認識できるようになり、呼び名がかれら一人ひとりの名前に移行していった。かれらは全員がある運動系クラブの部員であることや、坊主頭になっているのは機能的な追求ゆえ、体格が良いのもその競技のために鍛えていることなどが明らかになっていった。時が経って、かれらに対して怯えていた自分自身が滑稽に思えた。そして、特にリーダーである一人の学生は、きわめて礼儀正しく、私を見つけると遠くからでも巨体を震わせながら近くにやって来て、直立不動で挨拶するほどだった。そして、かれは私の担当する科目を取れる限り履修し、欠席することもほとんどなかった。

もしも数年前に、校門近くの学生たちの様子を調べてエスノグラフィを書くといい機会があったとしたならば、どのようなものになっていただろうか。かれの名も知らぬまま、「あいっら」として描いていたのかもしれない。本当に恐ろしいのは、このように描くことだろう。拙稿(宮内二〇〇四)でも述べたように、第一印象でのエスノグラフィはあまりにも危険だと思われる。印象記にもある種の意味があるだろうが、私たち「書く者」による記述によって、その場やその人物のイメージが固まってしまい、それが安易に流布されることに「恐れ」

があつてしかるべきではないだろうか。本書においては、特に「見る」と「推察」を推奨している。「聞き出す」のではなく、「寄り添うこと」によって見えてくることの重要性を述べたつもりだ。それは、私がフィールドワークという営みの中で、学んだことであるし、教えられたことである(本書第一章参照)。たからといって、「見る」と「のみをひたすら強調しているわけではない。」「あいっら」という認識のままに見ていたとしても、そこから得られる描写には問題があっただろう。見続けることによって、認識を深めていく。繋がりを持つことによって認識が変わっていく。このような「交流」を、誰もができるわけではないのかもしれない。そうすると、フィールドワークも誰もができるわけではないということになってしまふかもしれない。しかし、方法はいくつもある。その人にしかできない方法が必ずあるはずだ。そのような方法を見出す必要があるだろう。「交流」を誰もがまったくできないということもない。意志があれば、いつかは繋がりもたらされるはずである。と私は信じていたい。

「文献」

宮内洋 二〇〇四 「異なる文化」を語る前に—もう一つの「蜜柑」論— 『現代のエスプリ』特集：ポトムアップ人間科学の可能性 四四一号、至文堂 一八一—一八八頁

第二章　ワールドでの出会い

——私にはあなた方のことをどのように呼べば良いのだろうか？⁽¹⁾——

聞き取り調査やフィールドワークでは、お話をうかがう相手と対面する。さて、あなたの目の前におられる方は誰なのか。人は何らかの集団に所属しているし、否応なく所属させられてもいる。その集団を、私たちはどのように呼んだら良いのだろうか。本章では、日本社会の中のエスニック・グループについて考えてみたい。

はじめに

「あんたはどこかな? はア長州か、長州かな、そうかなア、長州人はこのあたりへはえつときておつた。長州人は昔からよう稼いだもんじゃ。このあたりへは木挽や大工で働きにきておつた。大工は腕ききで、みなええ仕事をしておつた。」(宮本一九五九b、九三頁)

これは雑誌『民話』に初めて掲載され、後に「忘れられた日本人」に収録されて「土佐源氏」として広く知られることになる。「聞き書き」の冒頭の一節である。ここから、少なくとも上記の文章のオリジナルの語り手とされる「土佐源氏」こと山本植造氏(一九四五年没)が用いたとされる「長州人」という、いわば一つのエスニック・カテゴリーが存在していたことが漏れ聞こえてはこないだろうか。

高知県の山中深くの集落、茶や谷で馬喰を生業として塩や茶を運搬し、晩年は精米・製粉業を営んでいた一人の男性のものとされる一九四一年時の「語り」から本稿を起こしたが、そのおよそ半世紀後、かつての「長州人」を覆い隠してしまった一つの大きなカテゴリーに容赦なくメスが入れられている。つまり、近年「日本人」とは何かという問いが社会科学・人文科学の領域においてますます多く見られるようになってきたのである。より正確に言うならば、「日本人」の脱構築的な作業が積極的に進められている。その一例として、一九六二年に東京都で生まれたという小熊英二氏の手による二つの大作(小熊一九九五、同一九九八)は両書共に、上記の問題にメスを入れたものとしては近年稀に見るほどの労作であると高い評価を受けている。後者を乱暴を承知の上で要約すると、「日本国家」が政策的に「日本人」を創出し、統合政策の一環として「日本人」であるかないかの境界線を恣意的に移動させていったということになる。このような国家の政策を対象とした歴史学的な研究はたしかに盛んであるのだが、この種の研究では、冒頭部で示したような宮本常一が聞き取った日常生活空間における「境界線」がこぼれ落ちてしまうのではないだろうか。当然

のことながら、資料的な制約が大きいだろう。つまり、現在残存する資料には日常生活空間を射程に収めた研究に寄与するものは少ないと思われる。⁽²⁾とは言え、今後はこのような日常生活場面上の「境界線」をあぶり出す必要があるだろう。そうでなければ、きわめて微細であると見なされ、この種の問題の射程外に置かれていた問題はそのまま残り残されてしまうように思われる。そのことはつまり、個人は国家の思惑通りに踊らされ、翻弄されたかのような「物語」ばかりが残されてしまうことを意味することにもなる。そして、国家が次から次へと繰り出す投げ縄を軽やかにすり抜け続けた、あるいは自らが生活する生活圏とは別に国家が勝手に制定してしまった国境を飛び越え続けた、いわば国家による「境界線」自体を意図的／非意図的に無効化したような個人一人ひとりの「物語」の総体は忘却されるのみということをも意味する。

このように、国家を擬人化したかのような研究の一方で、「民衆」などと一括りにカテゴリー化されていた一人ひとりの生活する個人に焦点を定めた研究も、さらに切迫感を伴いながら必要性を増していよう。このことを確認した上で、その生活する一人ひとりにおける他者に対する認識について少し考えてみたい。前述のとおり、「日本人」という強固な枠組みが実は「張りぼて」であるということは先行研究が示す通りであり、その中にはことばや文化を奪われてしまった幾つものエスニック・グループの亡骸が隠されている。だが、このような事実を情報としては摂取することができても、身体レベルで理解することはきわめて困難である。そのことは、「日本人」とは異なることされるエスニック・カテゴリーに対して、一つの確固とした自明のエスニック・グループとして見なしやすいということからも明らかだろう。ここまでの「日本人」の箇所を、「日本人」以外の他のエスニック・カテゴリーに置き換えたとしても、誤謬とはならない可能性は大いにあり得ることだ。そのような可能性に気づきにくい傾向を、どうやら私たちは持つてしまっているようである。一つの集団として歴史的に残存し続けるということは、一方で残り得なかつた異なる主張の者たちの亡骸を包含するということにもなるのだろう。この種の問題を私たちはどの程度理解することができるのだろうか。現在、大学内部の日常生活場面では「ポスコロ」などという牙を抜かれてすっかり飼い馴らされたかのような略称で流通・消費

されてしまっている「ポスト・コロニアリズム」は、この点を私たち一人ひとりに一瞬の余裕すら与えぬまま突きつけているように私には思える。

一方で、「当事者」側も戸惑いを隠せない。いくら公的な、あるいはポピュラーな呼称が認知されていたとしても、自らで違和感を感じる人たちがいる。例えば、先の小熊氏と同じ一九六二年に福岡県小倉で生まれたという李孝徳氏は、ニューヨークに滞在する自らのことをいかに呼ぶべきかと自問する(李一九九九)。そこで彼は、合衆国で生活する自らのような存在を表わす呼称を知ることとなる。(Japanese speaking Koreans)という呼称だ。彼はその呼称にアレンジを施し、(Japanese speaking (South) Koreans)とした。そして彼は自らを指すこの呼称を「日本語系韓国籍朝鮮人」と訳す。「日本語にすると何とも納まりが悪いが、今の私にはその納まりの悪さがどこかふさわしい」ということを付け加えながら⁽³⁾。彼は、いわば「当事者」である。上記のエピソードは、ポジションの移動によって、「当事者」が自らの自己呈示の方策に揺れが生じているとも表現できよう。あるいは、アイデンティティの問題という手垢に塗れたような文脈を持ち出すことも可能だろう。自らが生活する世界において「よそ者」的な視点を保持し続けたと思われるゴフマンは、アイデンティティに関してはずいぶん(「an actual social identity」と「a virtual social identity」の二つに分けた上で議論を始めた(Goffman 1963)。だが、現実はその単純ではない。では一体何が「actual」なのか、「actual」と「当事者」が認識していることは「actual」として妥当なのか、この点に関しては大いに議論がなされる論点ではあるが、ゴフマンによる措定にひとまず従ってみるならば、本章は後者の「a virtual social identity」にかかわる考察の範疇に分類されるものである。

つまり、本章で考察する問題とは、「日本のエスニシティ研究における「呼称」をめぐる問題」であるとは言え、それは「当事者」自身がいかなる「呼称」を呈示するのかという問題ではなく、「当事者」ではない者がいかなる「呼称」を用いるのかという問題に限定される。「当事者」も割り切れぬ思いを抱く「呼称」、その「呼称」自体が歴史的に揺れ続けている、そのような状況に少し触れたが、このような状況の中で、「日本社会におけるエスニシティ研究を行なう筆

者はいかなる（呼称）を用いるべきか」というきわめて個人的な戸惑いに端を発する素朴な疑問の考察でもある。筆者は「日本国内では有数の「多民族」都市のひとつと言える大阪府で生まれ、親が出生届を出した時から「日本国籍」を取得していた。そのこと自体を何ら意識することもなく、私は日本国内で生活し続けていた」（宮内一九九八b、一五二頁）。このような筆者が、日本におけるエスニシティ研究の中でいかなる（呼称）を用いるべきなのか。果たしてこの種の問題は、公共の場において語ることを憚られる、あまりにも些細な問題であるのだろうか。

日本のエスニシティ研究における“出会い”

まずは断っておかねばなるまい。本章は、日本のエスニシティ研究における（呼称）に関するものであり、しかも「当事者」ではない者がどのような（呼称）を用いるのかという問題に限定されると前節で述べたが、すべての（呼称）に関して言及するものではない。きわめて狭い範囲内に限定されてしまうだろうが、筆者自身のこれまでのフィールドワークの経験に沿ったかたちで述べていきたい。それはかりそめの悪しき経験主義なのかもしれない。先に触れた「日本人」の境界」において、小熊氏は「本書においては、法令や官庁の意見書などを含む政治的言説が検討されているが、これが支配や差別の「現実」とどう結びついていたかについては、厳密にはまた別個の研究が必要になる」（小熊一九九八、六六八―六六九頁）と語る。もしそうであるならば、自らの心理的プロセスをなぞることによって（自らも「対象」とすることによって）、そのようなもう一方の研究の端緒にたどり着けるような糸口を模索できるのではないだろうか。改めて換言するならば、本章において言及できるのは、日本国内におけるエスニシティをテーマとした対面的相互作用（face-to-face interaction）場面を含む近年の調査研究、しかも筆者自らのフィールドワークを進めるプロセスで知り得た学恩を受けたものみに限定される。このことを予め断っておきたい。

まずは最近の「社会調査」の教科書を紐解くことから始めたい。「正しいサンプリングを行っていない調査や、サンプリングの考え方を無視した調査から得られた調査結果は、それが一見いかに興味深そうな結果を示していようと、ま

まったく無意味であることを肝に銘じておいてほしい」とある（安河内一九九八、一四二頁）。しかも、この論文には「学生がよくやる誤り」の一つとして、「知り合いのつて、ネットワークを使つての調査」が挙げられて、批判されている。こ存じの通り、エスニシティに関する研究において、母集団にまできわめて厳密に目を光らせた「正しいサンプリング」がなされた調査研究は今のところ無いに等しい。例えば、日本で生まれ育った「外国人」の生活史を中心にした聞き取り調査を行なっている福岡安則氏は、次のように述べる。

「私の聞き取り調査は、無作為抽出（ランダム・サンプリング）の手続きを踏んだものではない。そんなことは、外国人登録原票の閲覧なしには、不可能だ。次々と人づてに紹介してもらいながら、調査を進めたものにすぎない。だから、私の調査体験をもって、安易な結論を導き出すことは慎まなければならない。」（福岡一九九三、三三頁）

福岡氏が指摘する通り、サンプリングを行なう際の母集団の一覧表になるであろう外国人登録原票のすべてを私たちは閲覧することができない。さらに言えば、「調査対象」としての「妥当性」を判断するために、何世代にも遡ることができない各家庭の家系図を勝手に閲覧することなど不可能に近い。ゆえに、たとえ「本意」であつたにせよ、いわゆる「つてやネットワーク」に頼らざるを得ないというのが実情である。しかし、このことは調査研究としての致命傷とはなりはしないと筆者は考える。「エスニシティとは何か」という問いに対して、研究者はこれまで「客観的・根源的立場」と「主観的・操作的立場」という両極の間でおつきり合い、そして揺れ続けてきた。だが、やや視点を変えてみると、どちらの立場にせよ、「重要な他者」との関係が鍵となつていふことにおいてはさほど変わりはないのではなからうか。すなわち、エスニシティ研究においては、「対象者」とされる諸個人の社会関係（主に家族・親族・友人など）がことのほか重要であると考えられる。そして、これらの関係が生成している場をどのような視点でとらえるかによつて、つまり単純化すれば（永遠であれ、一瞬であれ）固定してとらえるか、あるいは（永遠であれ、一瞬であれ）移ろうも

のとしてとらえるかによって立場は異なってくるように見える。誰によって育てられ、誰と共に育ち、誰に影響を受け、そして誰に影響を与えようとしたのか。どちらの立場にせよ、このような点を捨象することはできない。だからこそ、以上のような痕跡がわずかながらでも見つけることができる可能性を持つ「つてやネットワーク」が逆に積極的な意味を持つのである。

さて、このような「つてやネットワーク」によって出会う人たちを、筆者はどのような「呼称」で呼ぼうとし、そして実際に呼び、そして将来的には呼ぼうというのだろうか。対面的相互作用場面を含む調査に基づくエスニシティ研究において、「呼称」に関する問題は主に三つに区分できると思われる。すなわち、①「呼称」の選択、②「呼称」の非固定性、③「呼称」の更新といった問題群である。以下、実際の調査研究のプロセスを念頭に置きながら、時系列的に述べていく。

出会い、以前の問題

まず、第一の「呼称」の問題として、「呼称」の選択の問題がある。つまり、ある一つのエスニック・グループが存在していると思なされておき、そのグループに対していくつもの「呼称」がすでに存在しているときに、私たちは、どの「呼称」を選ぶのかという問題である。

自らを事例として、具体的に述べていきたい。筆者は自らのフィールドワークにおいて、「在日韓国・朝鮮人」として表わされることが多いエスニック・グループに属すると見なされている人たちに話をうかがう機会が非常に多い。この「在日韓国・朝鮮人」という呼称は現在ではかなり広範囲にわたって流布されているが、実はこれ以外にもいくつもの「呼称」が存在している。⁽⁴⁾ 少し説明するならば以下の通りである。

(1) 「在日韓国・朝鮮人」

まず、単なる組み合わせのみで考えると「在日朝鮮・韓国人」という呼称も可能であろうが、筆者の知る限りにおい

ては、こちらのほうは日常生活場面およびマスメディアでもほとんど見られる／聞かれることはない。

現在では、この「在日韓国・朝鮮人」という呼称がもつとも流布されたものであろう。崔洋一監督による映画「月はどっちに出ている」(一九九三年)においても「正しい呼称」として揶揄されてしまうほどに、総称としてはかなり浸透している。⁽⁵⁾ この呼称を最初に提唱したのは、一九三三年釜山に生まれ、一九四二年に渡日したという徐龍達(ソ・ヨンダル)氏である。なぜ、彼がこのような呼称を提起せざるを得なかったのか。やや長いが、この呼称を提起した際の文章を引用しよう。⁽⁶⁾

「祖国の分断の悲劇は、われわれの研究者生活のうえにも、絶えずその胸中に鋭いなにかをつきつけるのが常であった。筆者もこれまで、『韓国』『朝鮮』の用語を論じることをためらい続け、あるいはタブー視してきたのであるが、一般の韓国・朝鮮人研究者も、ひたすら統一的呼称問題を他力本願的に避けてとおり、あるいは自己の認める一方の呼称に安住してきた傾向にあったことは否定できないと思われる。だが、すでに南・北の分断も36年以上続き、『韓国』『朝鮮』用語の解決を日本社会に押し付け、われ関せずの態度を取り続けることも許されない時代にたちいたったと判断する。」(徐一九八一、三二七三二八頁)

そこで徐氏は、①朝鮮半島の歴史、②朝鮮半島の現状、③日本の大学における言語の科目名、④現在の朝鮮半島における平和的統一問題、⑤「在日主体」の創造性という五つの観点から(③のみは位相が異なるように思われるが)、「韓国」と「朝鮮」の「分断」されたままの用語ではなく、統一された「韓国・朝鮮」という呼称を提起している。基本的には、朝鮮半島における「分断」の問題を焦点として、この呼称は生まれたと見てよいだろう。⁽⁷⁾

(2) 「在日朝鮮人」

先の(1)の呼称が登場する以前、少なくとも戦後の日本国内のメディアにおいては、この呼称が一般的に用いられていたと言つてよいだろう。⁽⁸⁾かつては「日本人」側が無自覚かつ侮蔑的に用いていたために、現在でも差別的なニュアンスが残存しているように思われる。筆者の生まれ育った大阪府東部(かつての河内)においては、少なくとも一九七〇年代においても「チョーセン」ということは自体が差別語として機能しており(同様の指摘として、原尻一九九八bがある)、「在日朝鮮人」という呼称を公的な場面で用いることは大いに躊躇されていたように記憶している。

一方で、この呼称が現在多く用いられなくなったことについては、もう一つの理由が挙げられよう。⁽⁹⁾国籍の相違によつて、「韓国」籍の人たちを「在日韓国人」、「朝鮮」籍の人たちを「在日朝鮮人」と区別して呼ぶことも少なくない(福岡・金一九九七など)。これにより、「在日朝鮮人」という呼称は、日本在住の「朝鮮」籍の人たちのみを表わしているという誤解を生じさせてしまうかもしれない。しかも、一九八四年四月にNHKラジオおよびテレビに登場した「現代の朝鮮のことば」を学ぶための番組が実際に放送されるに至るまでに繰り広げられた「韓国語―朝鮮語」論争でも何度も耳にしたように、この呼称は、人数の上でも圧倒的な「韓国」籍の人たちを無視しているといった批判もしばしば聞かれる。

(3) 「在日コリアン」

近年マスメディアにおいてよく用いられることによつて、最近著しく広まったように思われる。特に、テレビを中心とした対象の不特定度が高いマスメディアにおいて、主に出稼ぎを目的として多くの外国人が来日したバブル経済真つただ中の一九八〇年代後半以降、よく用いられてきた(寺岡一九九五、野入一九九六など)。それは、上記のように、先の二つの呼称では種々の問題がつきまといてしまうからである。つまり、「当事者」からの異議申し立ての問題である。だが、この呼称はそれらを回避する可能性に満ちている。メディア関係者にとっては非常に都合のよい「呼称」というわけである。さらに、「コリアン」という表現は、少なくとも視角的には朝鮮半島の南北の政治的分断の緊張関係を隠

蔽できるというビジュアルな側面を持ちあわせていることにも注意したい。

(4) 「コリア系日本人」

アメリカにおける「アフリカン・アメリカン」といった自らのルーツを明示する呼称の普及から出てきた呼称だと思われる。少なくとも、この呼称は現在の日本社会の状況にはそぐわないだろう。つまり、先のアメリカにおいては、本質的には厳然としたWASP (White Anglo-Saxon Protestant) 中心社会であったとしても、建て前として「多民族社会」であることを標榜している。よって、アメリカ国民は出自としては一枚岩ではないという前提により、少なくとも公的には出自が覆い隠されることはほとんどないと考えられる。

だが、翻って日本国はどうであろうか。以前に比べるとかなり状況が変わっており、この呼称の提唱も目につき始めたが(田口一九八四など)、自らの出自が国外にあるということ周囲に知らしめることと、現在は「日本人」であることが何の異和感もなく両立すると見なす人は日本社会においてはまだ少ない。だが、将来的に種々の意味での「ダブル」(かつては「混血」という何ともおぞましい呼称があった)が増大していくと予想され、この呼称は突然「異議申し立て」に絡んで焦点となるかもしれない。

(5) 「在日」

これは前述の(1)～(3)までの呼称の略称であると判断されるが、実際には日常生活の口述場面においてはもつともよく用いられているのではないかと思われる。すなわち、特別な感情を伴うことなしに、ゴフマンの言う「舞台裏(backstage)」においては、「当事者」であるなしにかかわらず、もつとも用いられている呼称であるように思われる(Goffman 1959)。厳密に言えば「在日」は日本にいるということを示している表現であることになるのだが、日本国内において「在日」と言えば、主に日本国内で生まれ育った「韓国・朝鮮」籍の人たちを表わす(呼称)とほぼ同義となっている場合が多い。⁽¹⁰⁾

他にも、まだいくつかの呼称が存在する。例えば、「在日コリア人」(植村一九八六)や「在日韓朝鮮人」がある。特に後者は、(1)の呼称の提唱者である徐氏が、最近になって提唱している呼称である。彼は「韓と朝鮮は、もとよりヨーロッパの二元論的な対立、互いに排斥しあうたぐいの対立ではない」とし、以前の呼称から「国」を削除して、より統一的な呼称として用いている(徐一九九二)¹¹⁾。

さて、ここに挙げただけでも、これらの「呼称」が存在するわけだが、この中から私たちがどの「呼称」を用いるべきなのだろうか。

筆者の場合は、文章および口述場面においては、先の(2)の「在日朝鮮人」という呼称を総称として用いてきた。⁽¹²⁾ それには訳がある。「筆者は大学進学に伴い大阪府から北海道に移住したが、およそ六年前から「在日朝鮮人」女性を中心になつてつくられた朝鮮の楽器演奏を行うグループ(主にチャング中心)にメンバーとして参加している」(宮内一九九八 a、二〇〇頁)た。そのグループに出会うまで、あるいはそのグループを通して出会うこととなつた、主に修士課程時代のフィールドワーク時に出会つた方々に多大な影響を受けているからだ。つまり、筆者は現在までに、朝鮮半島の分断された二つの国が一日も早く統一されることを願う「在日朝鮮人」そして「日本人」(自称/他称も含めて)の方々に多く出会つてきた。彼/かの女たちは、「在日韓国・朝鮮人」という呼称そのものが、分断された二つの国という現実をただ無自覚に追従するものだとして、批判的な態度を取る人が多かつた。⁽¹³⁾ 筆者自身も彼/かの女が語る「思い」に多大な影響を受け、現在においては優勢な「在日韓国・朝鮮人」ではなく、「在日朝鮮人」という呼称を総称として用いている。ここで自らのことをあえて述べるのは、「特定の政治権力への自由を主張するならば、その権力にくみしていることを自覚し、表明しなければならない」(原尻一九九三、一四三頁)という主張に大いに賛同するからである。さらに述べれば、この二つの分断された国々を、この「在日韓国・朝鮮人」という呼称が厳密に代表しているかと言えば、とても微妙でもある。と言うのも、「日本政府は現在(一九九八年六月)にいたるまで、朝鮮半島における主権国家として朝鮮民主主義人民共和国を認めていないので、あるいは日本と国交がないので、「在日」の国籍等の記載欄での「朝鮮

は朝鮮民主主義人民共和国の意ではなく、出身地域名称、あるいは単なる「符号」として考えられている(「原尻一九九八b、九〇頁」)からである。フィールドワークを進める中で学んだこのような知識も、筆者が「在日朝鮮人」という呼称を用いることを後押しし続けている。

また同時に、「朝鮮人」という語感の響きから醸し出される日本社会における過去そして現在の差別から目を背けたために、響きの良い(呼称)が用いられる場合が少なくないが、この現象に関して筆者は疑問を強く感じていることも理由の一つである。このことは筆者の幼年および少年時代に深くかかわることだろう。前述したように、筆者が生まれ育った地域における筆者の身動きが取れた狭い範囲内では、少なくとも筆者が記憶している限りに過ぎないが、一九七〇年代から八〇年代半ばまでくらは公的な場で「朝鮮人」ということばをはっきりと耳にすることは稀だった。その稀な例の一つは、義務教育時代に学校で頻繁に行なわれていた「同和教育」の場であった。だが、公的ではない場では耳にすることは少なくはなかった。その際には大半の場合、嘲りや罵倒という悪意の感情が伴っていた。一方で、自らが「朝鮮人」と口に出すことに対しては心理的な抑圧があり、筆者はほとんど口に出すことはなかった。学校内の友人間では朝鮮にまつわると思われるような話題はタブーだったように記憶している。このような「心の中の重し」が取り払われたのは、筆者が北海道に移ってからのことだった。だから、筆者は総称として「在日朝鮮人」という(呼称)を用いていると記したが、その当初は以前の心理的な抑圧が妨げになり、声を潜めてしまったりスムーズに発音できない場合もあった。そして、比較的口にしやすい「在日」という呼称に逃げていたようにも感じる。その傾向は現在においてもまだ消えたわけではない。

以上、筆者自身の(呼称)の選択の理由を自らの体験と共に記したが、ここから(呼称)の選択そのものが、自らの体験が色濃く刻み込まれた判断に基づいて行なわれた、きわめて政治的な行為であることが鮮明になってきたのではないだろうか。実際に、筆者が出会った「在日朝鮮人」の方々は全体からすればほんの一部に過ぎないし、朝鮮半島の統一はすべての「在日朝鮮人」が願っているとは必ずしも言えないので、政治的な偏りがあることは否めないであろう。

しかも、彼／かの女の主張に賛同している筆者自身も、科学的・中立的な立場にあるとは言えない。⁽¹⁴⁾ 意図的、非意図的にかかわらず、いくつもの〈呼称〉の中からある一つの〈呼称〉を選ぶという行為そのものが、きわめて「政治的な行為」(しかも、ある種の決断をも伴った)であるという点は、エスニシティ研究の前段階として見過ごすことができない重要な問題として指摘できるであろう。つまり、いくつもの候補からいかなる〈呼称〉を選択するのかという問題と、使用者の政治性の問題としてまとめられよう。そのことを逆手にとつて、読み手および聞き手の側に立つならば、その〈呼称〉の使用者の社会認識と、使用者を基点とした社会関係を読み取ることはそれほど困難なことではない。

“出会い”以後の問題

1. 〈呼称〉の非固有性

大半の調査研究において、私たちは生身の人間として互いに出会うこととなる。このことは郵送による調査などの方法を用いる以外にはほぼ避けがたく、私たちはどうしても互いの身体を伴いながら対面しなければならぬ。

このような調査のプロセスにおいては(たとえきわめてリジッドな調査票を用いたとしても)、被調査者との間で、調査自体の目的とは焦点がずれた会話が蓄積されているはずである。だが、それらは記憶として保存されずに抹消されていたのだろうか。調査報告書や論文や著書等をまとめるにあたっては、以上のような“些細な経験”が思いのほか役に立ったという経験のある方は少なくないように思われる。調査においては(それはエスニシティ研究のみに限らないかもしれないが)、被調査者との何気ない会話や被調査者の語りのトーンから醸し出される雰囲気なども含めて、被調査者の話をうかがう私たち調査者は知らず知らずのうちにも、面前の個人とその家族の軌跡、そして、そこから生み出されると共に、逆にその軌跡をも支えたであろう彼／かの女を思想を思い描いているのではないだろうか。

さて、ここで〈呼称〉に立ち戻つて考えてみたい。

〈調査者〉であった私たちはかつてのまま、つまり調査以前の私たちのままでいることができるのであろうか。この

ときには先の「呼称」選択の問題がそのまま立ちはだかるわけではないだろう。ここに、先に述べた第一の問題とは位相の異なった問題がすでに姿を現わしていると思われる。すなわち、すでに存在している「呼称」は、実際に「出会い」という経験をくぐり抜けた私たちにとって、その面前にいた人たちのことを表わしたものととして果たして妥当なのかという疑問である。少なくとも、私たちは彼／かの女たちと出会い（換言すれば「対面的相互作用」を行ない）、たしかに彼／かの女たちの「生の声」を知覚しているはずである。仮に、意識的に他者の声を遮断して自論の証明作業のみに没頭したり、あるいは功利的に有用だと思える情報のみを全神経を集中させていたとしても、知覚はされているはずである。

ならば、「出会い」を経た私たちが、自らが用いる「呼称」と現実に眼前にいた人たちとの間に、ある種の違和感を抱いたとしても、何ら不思議なことではない。問題は、その自らの感覚に忠実に心中に違和感を抱くのか、何も無かったかのごとく意識下に抑圧して自らを欺くのか、どちらを選ぶのかということになるのだろう。

2. 「呼称」の更新

前記において、自らで感じた違和感を抑圧しない道を選択したならば、先程までの「呼称」を用いることにある種のためらいを感じるかもしれない。⁽¹⁵⁾この場合、眼前にいた人たちに対する「呼称」は変更を余儀なくされるかもしれない。こう考えてみると、「呼称」は更新されていく可能性を秘めているようである。

以上のことを筆者に気づかせてくれたのは在日外国人と都市について研究する広田康生氏とのやり取りからである。⁽¹⁶⁾

広田氏は、横浜市鶴見区における「日系人」たちの繋がりを追うことによって、彼／かの女たちの適応（被統合）の過程の一端を明らかにした（広田一九九七）。さらに広田氏は、その後サンパウロのリベルダージ地区（Bairro de Liberdade）を訪れ、自身によって彼／かの女たちの軌跡を逆にとどり、その応答を記してもいる。このような広田氏に対して（逆に言えば、このような広田氏だからこそ）、かつて筆者は彼の用いる呼称に対して異議を唱えたことがあった。彼

の調査結果より、彼／かの女たちの多くが（様々な意味において）「沖繩出身者」であり、そのうえ彼／かの女たち自身も（そして何よりも広田氏自身も）そのことに重きを置いているように見られるにもかかわらず、広田氏が「日系」という呼称にこだわる根拠を尋ねたことがあった。そして、例えば「琉球系ブラジル人」といった⁽¹⁷⁾新しい呼称を用いる方がふさわしいのではないかという問題提起を行なったことがある。

さて、筆者が一九九四年時に広田氏に対して提起した、この呼称は果たして妥当だったのであるうか。以下は、呼称への更新にまつわる問題の指摘である。エスニシティに焦点を絞っていくならば、「琉球」というカテゴリーでは到底すまされはしない。筆者が一九九四年六月二三日から始めた沖繩島およびその周辺の島嶼部のフィールドワークにおける出来事が思い起こされる。例えば、一九九四年初夏、筆者は琉球大学の学生数人のグループと知り合った。彼／かの女たちは「はるばる北海道からやってきた」筆者に対して「沖繩らしい」場面をわざわざ準備してくれた。例えば、観光客向けの海岸ではなく、非常に美しい夕焼けを思う存分仲間内で楽しむことができる地元の人たちで占められるビーチに連れて行ってくれた。また、日が暮れてからは友人たちを呼び出して、筆者を歓迎する宴の席を設けてくれた。そこでは、まず豚足が出され、沖繩では酒の席で必ず豚足を食べるのだという説明も付け加えてくれた。他にもゴージャスなチャンプルーをはじめとするメディアで紹介され続けているために、筆者も「情報」としてはすでに知っていた「郷土料理」をピクアップして、筆者に勧めてくれた。このように、彼／かの女たちの一部は筆者に対して、自らが見られていると思われるであろう「沖繩のひと」像を演じているように見えた。⁽¹⁸⁾だがしばらくして、その学生グループ（沖繩県内では有数の「エリート」集団となるのだが）内において統びが見え始めた。沖繩県に生まれて初めて訪れたばかりの筆者は、目の前の全員が「沖繩のひと」として知らず知らずのうちに認識してしまっていた。正確には彼／かの女たちはすべて沖繩島出身者ではなかった。筆者に自らの文化を説明するにしがたい、周辺の島嶼部出身者との文化にまつわる食い違いが見られ始めたのだ。これは筆者のような「よそ者」が参与することによって、それまでの「常識」がその場での「常識」ではなくなり、その「常識」自体を説明しなければならなくなるといった必要性が生じることに